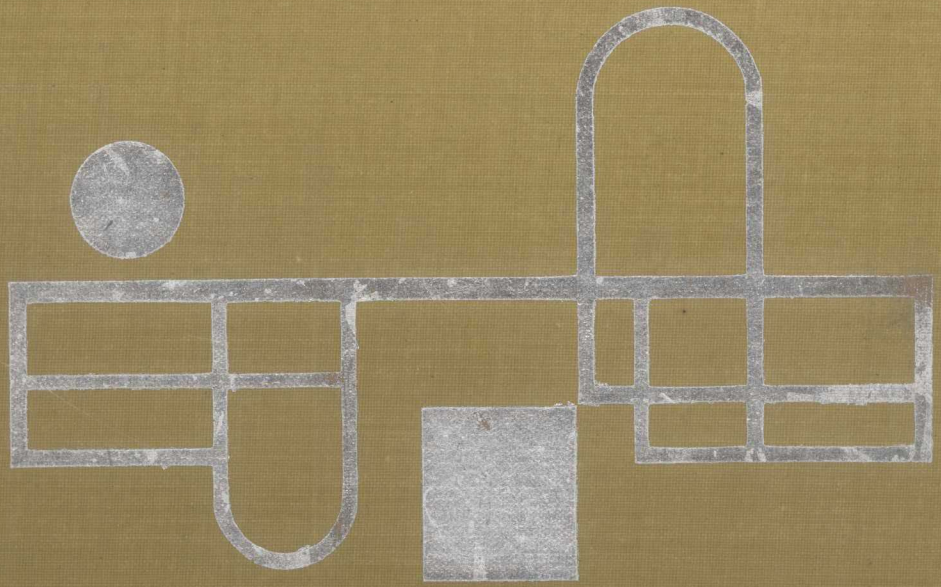

豐島與志雄
岸田國士
集

現代日本文學全集

33

筑摩書房版

現代日本文學全集 33

豐島與志雄
岸田國士集

昭和三十年三月五日 印刷
昭和三十年三月十日 發行

著者 豐島與志雄
岸田國士

東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行者 古田晁
東京都新宿區改代町二三
印刷者 多田基
東京都千代田區神田小川町二ノ八
發行所 筑摩書房
〔電話〕東京(二九局)七六五一(代表)(29)
振替 東京 一六五七六八

製本 有限會社 藤田製本工場
印刷 多田印刷株式會社
整版 株式會社 精興社

豐島與志雄集　目次

愚かな一日……五
理想の女……一四
白血球……三七
野ざらし……四五
道化役……九六
白い朝……一〇九
白塔の歌……一二〇
秦の憂愁……一三四
沼のほとり……一四〇
白蛾……一四六
高尾ざんげ……一五三
水甕……一六〇
どぶろく幻想……一六八
山吹の花……一七五

岸田國士集　目次

落葉日記……一八五
古い玩具……二五六
チロルの秋……二七九
紙風船……二八七
牛山ホテル……二九三
ママ先生とその夫……三一五
淺間山……三三〇
歳月……三五三

女人渇仰……三七四
カライ博士の臨終……三八四
豐島與志雄（中島健藏）……三九九
解説……四〇七
岸田國士論（福田恆存）……四〇三
年譜……四一三

裝幀　恩地孝四郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

豐島與志雄集

山吹の花

豊島與志雄

湖心に眼があった。青空を映し、空に流る白雲を映して、悠久に澄みきり、他意なかったが、それがともすると、田宮の眼と一つになった。田宮の眼が湖心の眼の方へ合体してゆくのか、湖心の眼が田宮の眼の方へ合体してくるのか、いづれとも分らなかったが、

愚かな一日

瀬川が來てるのだなと夢現のうちに考へてゐると、何かの調子に彼はふいと眼が覺めた。と同時に隣室の話聲が止んだ。彼は大きく開いた眼で天井をぐるりと見廻した。それからまた、懶い重みを眼瞼に感じて、自然に眼を閉ぢると、また話聲が聞えてきた。やはり妻と瀬川との聲だつた。

彼はその方へ耳を傾けた。

「……どうして取るのでございませう?」

「さあ私も委しいことは聞きませんでしたが、醫者に御相談なすつたら分るでせう。もし本當にさういふことがあるなら、もう專門醫の間にはよく知られてる筈ですから。然し何しろ馬一頭を、そのためにわざわざ殺さなければならないから、たとひ效果が確かでも、廣く實際に應用されるわけにゆかないのだと思ひますね。私の友人の場合でも、院長が最後の手段として試みたものださうですから。」

「でも確かにそれで治るものとしましたら……。」

「所が確かに治るとも斷言出來ないのかも知れません。多くは體質によるんでせうから。ただ私の友人の場合は、その手當が體質によく合つたものだらうと思はれます。」

「馬一匹どれ位するものでございませうか。」

「さあ……。そしてまた、どんな馬でもいいといふのではないかも知れません。」

「ではお醫者に尋ねてみませうかしら。」

「さうですね。然しそれにも及ばないでせう。この頃だいぶお宜しいやうではありませんか。」

「ええ、いくらか宜しいやうにも思はれますのよ、熱もずつと下つてゐますし、痰も殆んど出ませんから。」

「屹度よくなりますよ。河野君は頭がしつかりしてゐますし、少しの病氣位は頭の力で治るものです。」

「ですけれど、この頃何だか苛ら苛らしてる樣子が見えますので、それが私心配で……。そして追々寒くもなりますから。」

……。

會話はそれきり再び馬のことには戻つてゆかなかつた。然し彼はしきりにそれが氣になり出した。全く思ひも寄らぬ馬といふものが、突然其處に現はれてきて、自分の病氣に重大な關係があるらしい暗示を殘したまま、遠くへ去つてしまつたのである。彼はそのことをあれこれと推測しながら、一方では妻と瀬川との會話に耳を傾けてゐた。然し會話は途切れ勝ちに種々のことに飛んでいつて、いつまでたつても馬の上に戻つて來なかつた。彼はそのままじつとしてゐるのが苦しくなつた。然し今急に眼が覺めたやうな風を裝ふのも、何となく憚られた。

隣室の會話はなほ續いていつた。

「……實際ここは氣持ちが宜ろしいですね、こんな處に居れば病氣なんか自然に治つてしまひます。私も、伺ふ度毎に餘り長くは御邪魔すまいと思ひながら、來てしまふとつい泊つていつたりなんかして、お見舞に上るのだか遊びに來るのだか、自分でも分らない位です。」

「初めからお遊びのつもりでいらつしやればいいではございませんか。こちらへ越して來てから、訪ねて下さるお友達も少いので、河野も非常に淋しがつてをります。私もあなたに來て頂くと、何だか力强いやうな氣が致しますの。あなたがお歸りになると、河野はいつも默り込んで淋しさうにしてゐますし、私はまた何となく賴り無いやうな氣持ちになつて、家の中が急に陰氣になりますのよ。」

「それでは折角御伺ひしても、差引零になるわけですね。」

「ええ、だからなるべく長くゐて下さらなくてはいけませんわ。今日もお泊りなすつて宜ろしいんでございませう。」

「さうですね、河野君の氣持ちがよかつたら……。」

「是非さうして下さいね、河野も喜ぶでせうから。この節では、病氣が少しよくなつたやうですから、早く元の身體になつて長い物を一つ書

きたいと、始終申して居りますの。いくらとめても、原稿用紙を枕頭から離さないで、何か二三行書いては考へてゐますのよ。でもやはり頭に力がないと見えて、その紙を破きすててはまた寢てしまひます。」

「今からそんな無理をしてはいけませんね。」

「ですけれど餘り氣に逆つても悪いと思ひまして、私は傍についてゐながらどうしていいか困つてしまひますの。」

「それはお困りでせう。私からも、暫くは靜にしてゐるやうに勸めてみませうか。」

「ええどうぞ。」

「そして河野君はやはり小說でも書かうとしてゐるのですか。」

「何だか感想みたいなものですの。書いてはすぐに破きすてますから、私にはよく分りませんけれど、つぎ合はして讀めるやうなものは、私そつとしまつてゐます。後で何かの役に立つかも知れないと思ひまして。」

「それはいいことをなさいましたね。河野君も喜ぶでせう。病中の實感は後でふり返つても、なかなかよくは浮ばないものです。その時の直接の感じが一番尊いものです。」

「でもごく少ししかありませんのよ。あなたにならお目にかけても宜ろしいんですけれど、河野はいつも、書きかけのものを人に見られるのが嫌ひなものですから、どうか悪く思はないで下さいな。」

「なに、それが本當ですよ。誰だつて書き捨てたものを人に見られるのは嫌なものです。」

……。

彼はふと會話の跡をつけるのを忘れて、一人考へに沈んだ。いつか書き捨てた自分の文句が、俄に頭に蘇つてきたからである。

——病者を憐れむは健康者の自由である。健康者に反抗するは病者の自由である。然し……健康者が病者に何かを與へ、病者が健康者から何かを受くる時、その感激は前の自由に對して如何なる意味を齎すか？

それは、この前の土曜日に瀨川が訪れて來た後の走り書きであつた。その日彼は珍らしく氣分がよかつた。氣管支加答兒の方は殆んどよくなつたと醫者から告げられてゐた。朝食の膳に向ふと、粥のわきに少し赤の御飯が添へられてゐた。妻は心持ち眼を伏せて笑ひながら、「今日はあなたの誕生日よ、」と云つた。考へてみるとなるほどさうであつた。彼は急に嬉しくなつた。明るい未來が待つてゐるやうな氣がした。ただ添へただけと妻が云ふのも構はずに、赤の御飯を少し食べた。床の上に起き上つて、長い間庭の方を眺めた。「今日は妻と二人で、他人を交へずに、快い一日を送らう。」と彼は考へた。すると午過ぎに瀨川がやつて來た。彼の顏は曇つた。餘り口數もきかなかつた。然し瀨川はなかなか歸らうともしなかつた。夕方になると、「今日は河野の誕生日ですからゆつくりしてゐて下さいね、」と妻が云つた。彼は不快になつた。「馬鹿！」と妻に怒鳴りつけたかつたが、それをじつと堪へた。折角の誕生日を瀨川から踏み躙られるやうな氣がした。然しその晩、少しの酒に瀨川は妙に興奮して創作上の苦悶から、次では自分の缺點や短所をさらけ出して話した。快い緊張が彼にも傳つてきた。久しぶりで藝術上の議論を戰はしたりした。

「急に君に逢ひたくなつたから、書きかけの原稿を放り出してやつて來た、」と瀨川は云つた。話し疲れて彼が眼を閉ぢると、瀨川は云つた。「自分のことから病中の君まで興奮さして許してくれ。」彼が眼を開くと、瀨川は眼を潤ましてゐた。二人は長く默つてゐた。

翌日瀨川が歸つていつた後、彼は一人で考へた。「昨日一日を、妻と二人で靜に送る方がよかつたか、或は瀨川と珍らしく緊張した一晩を過した方がよかつたか？」肺を病んで長らく轉地先に無聊な生を送つてゐる彼にとつては、その一日々々を如何に暮すべきかといふことは重大な問題となつてゐた。瀨川が歸つていつた後、彼は前のやうな數行を認めたのである。

その時のことを思ひ浮べると、彼は何とも云へない淋しい氣になつた。隣室の會話はなほ途切れ勝ちに續いてゐた。然しもうそれに耳を傾けるのも億劫になつてきた。じつと眠つたふりをしてゐるのが堪へられなくなつた。「どうして自分は妻と瀨川との話を盜み聞きする氣になつたらう？」とも自ら反問してみた。すると「馬」といふことが頭に浮んできた。譯の分らぬもどかしさが胸に感じられた。

彼は寢返りをした。
その音をききつけてか、妻はすぐにやつて來た。
「あなた、あなた、お眼覺めなすつたの？　今瀨川さんが來て被居してよ。」と彼女は云つた。
彼はその聲に初めてはつきり眼を覺ましたやうな樣子をした。
「さう、瀨川君が？」
「ええ、先刻から來てゐらしたけれど、あなたがよく眠つてゐられるものですから……。」
彼が何とも答へないうちに、瀨川はもう其處にはいつて來た。
「やあ、隨分よく眠るね。」
「だいぶ前から來てたのかい。」
「いや、つい今しがただつたが。」
彼は瀨川の顏をじつと見た。健康さうな顏の色、綺麗に分けた頭髮、大膽でどこか皮肉らしい眼付、頑丈な鼻、剃り立ての蒼みがかつた頤。彼は其處に身を起さうとした。
「そのままがいいよ。」と瀨川は云つた。
彼はまた頭を枕につけた。何で起き上らうとしたのか、自分にも分らなかつた。そして心の底にうろたへてる何物かを感じた。
「氣分はどうだい？」
「大變いい。」と彼は答へた。「暖い時なら少し位起き上つていいと醫者も云つてる位だから。」
「然し今が一番大事な時だよ。」
「だから用心してるよ。」
「どうだか。」
「實際だよ。」
「さうだね、原稿を書いたりなんかしてさ。」
「ああ、さうか。あんなものは君、退屈凌ぎに三四行づつ書きちらしてはそのまま破き捨てるんだから、身體に障りはしないさ。」
「然し君の初めのつもりでは、少し長いものを書くつもりでペンを執るんだらう。さういふ頭の努力がいけないんだよ。」
「君の云ふ意味は僕にも分る。未來が大事だから現在を用心しろといふんだらう。それはさうなくてはならないことだ。然し長く病氣して寢てゐると、その現在を用心するといふことが、違つた意味に感じられてくる。未來のために現在のことは多少犠牲にしなければいけないといふのが、健康な時の解釋だ。然し病んでゐる時には、未來のために現在のことを出來るだけ大切にしなければいけない、といふやうな氣持ちになる。人の心のうちには、何かが絶えず根を下してゐる。その根を下ろしてゆくものを注意深く見守つてゐなければ、いい未來はやつて來るものではない。僕は此處に轉地して來てから、毎日庭の方をばかり、庭の些細な變化を、自然に眺め暮したものだ。すると或る朝、今まで眞黑な裸の土だと思つてゐた處が、一面に綠色の苔に蔽はれてるのを見出して、自ら驚いたことがある。何にもないと思つてゐた處に、何事も行はれてゐないと思つてるうちに、實は苔が次第に根を下して繁殖してゐたんだ。それに氣付いた時には、もうどうにもならないほど苔が一面に生じてゐた。僕達の心にもさういふことが行はれるものだ。知らず識らずのうちに種々なものが根を下してゆく。それを氣付く時にはどうにも出來ないほどその根が深くなつてゐる。切迫つまつたはめといふのは、さういふ狀態の時をいふのだ。そしてその推移がひそかに行はるれば行はれるほど、人の注意を逃れることが多ければ多いほど、益々危險が大きくなる。だから未來をよくせんがためには、現在を、殆んど無意識的に行はれる現在の心の推移を、深く注意してゐなければいけない。現在を輕蔑してはいけない。うつかりしてはいけない。馬車馬みたいに遠くをばかり眺めて、足下をなほざりにしながら馳け出してはいけない。さういふ意味で僕は現在を大事にすることを知つた。そしてそのために、現在の氣持ちを時々紙に無駄書したくなるんだ。まだ僕は頭に力がなくて、はつきりまとまつたものを書けないのは遺憾だが、無駄書でもすることによつて、その時々の感情は何かはつきりしたもので裏付けられるやうな氣がする。僕が書くのはさういふ風なもので、何も病中でゐながら創作をやらうとあせつてるのではない。」
話してるうちに彼は何だか「慘めな」とでも形容したいやうな氣分に浸された。そして最後の言葉を投り出すやうにして口早に云つてのけた。
「然し餘り無理してはいけないよ。神經も餘り尖りすぎると却つて自分を傷けるからね。」

「自分を傷ける……。」さう鸚鵡返しにして彼は口を噤んでしまつた。

先刻から紅茶を運んできて二人の話を聞いてゐた妻は、その時言葉を挿んだ。

「可笑しな人達ね、逢ふと早々から議論なんか初めて。」

「ははは、」と瀬川は笑つた、「なるほど、まるで病人に議論でもふつかけに來たやうな工合になつてしまひましたね。」

瀬川のその笑ひに彼は冷たいものを感じた。それから自分を病人といふ普通名詞で呼ばれたのに對して、輕い反感が起つた。その冷かさや反感はやがて、彼を憂鬱な氣分に引き入れてしまつた。彼は心とあべこべな口の利き方をした。

「今日はゆつくりしていつてもいいだらう。」

「さうだね、別に急ぎもしないけれど……。」

「それでは泊つてつたらどうだい。」

「然しいつも邪魔ばかりしてるからね。」

「なに構やしない。僕は退屈してる所だから。」

それから彼は黙り込んで、ぼんやり天井板を眺めながら、また時々妻と瀬川との話の音聲を耳にしながら、鬱屈してくる感情の底で考へた。——瀬川こそ自分の親友だ。忙しい中を度々訪れて來てくれては、大抵一晩位は泊つていつてくれる。而も肺結核といふ自分の病氣を恐れもしないで、一緒に食事をし、一緒に寢轉んで、距てない話をしてくれる。然し、さういふ瀬川の友情を喜び感謝しながらも、なぜ自分は彼が來ると一種の氣づまりを感ずるのであらうか。平素の淋しい自分は彼の長居を却つて喜ぶ筈ではないか。また彼とても、仕事の合間々々の氣晴しに、別莊にでも來るやうな氣で、自分を訪ねてくれるのではないに違ひない。自分に何かと力をつけてくれたり、自分の身體を心配してくれたりする彼の友情は、美しい深いものに違ひない。然るにそれを初め感謝してゐた自分の心は、なぜこの頃一種の反撥を感ずるやうになつたのか。學生時代の友情は一種の特權を與へるが、友情が特權を與へなくなる時もやがて來るのか。

其處まで考へて來て彼は淋しくなつた。自分自身が淋しくなつた。そして眼を閉ぢた。

「まだ眠いのかい。」

さういふ聲がしたので眼を開くと、瀬川が彼の方を覗き込んでゐた。彼は苦笑しながら答へた。

「うむ。今日はどうしたのか妙に眠い。」

「ではゆつくりお眠りなすつたらどう?」と妻が云つた。「その間瀬川さんには海の方でも散歩して來て頂いたら……。私は晩の仕度を整へておきますから。」

「それがいい。」と彼は云つた。「今晩は何か少し御馳走をおしよ。瀬川君、失禮だが僕は少し眠るから、海の方でも歩いて來ない? 晩秋の海つていいもんだよ。」

「僕もさう思つてた所だ。では夕方また此處で、三人落ち合ふとするかね。……此の次は君も一緒に散歩出來るといいね。」

瀬川が海の方へ出て行くと、彼は横に寢返りをして、襖の紙の枇杷色をじつと眺めてゐた。すると妻がその顏を覗き込んで云つた。

「あなた、今日はどうしてさうお眠いんでせう?」

彼は妻の顏をちらと眺めて答へた。

「なに、別に眠かないが、少し一人で居たかつたからああ云つたんだ。」

「それなら初めからさう被仰ればいいのに。瀬川さんに遠慮なんかいらないぢやありませんか。」

「然し折角來てくれたんだから、さうもいかないさ。それはさうと、今晩何か御馳走をおしよ。」

「ええ。」

彼は暫く考へてから遂に云ひ出してみた。

「さつき妙な夢を見たよ。」

「どんな?」

「何でもね、廣い野原だ。いつまで行つても野原ばかりで、畑も丘も見えない。僕はその中を非常な速さで横ぎつていつた。まるで汽車にでも乘つてるやうで、とても人間の足の速さではない。その上自分の身體はじつとしてゐて、ただ周圍の景色だけがずんずん後に飛んでゆくんだ。變だなと思ふと、その時初めて氣が付いた、僕は馬に乘つてゐたんだ。素敵に立派な馬でね、その馳け方の速いつたらないんだ。得意になつて鞭をあつてゐると、どうも樣子が變なので、そつと下を覗いてみた。するとどうだらう、馬

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

は僕を乘せて空中を翔つてゐるんだ。天馬空を翔るとはあのことだね。所がそれに氣付くと同時に、僕は頭がぐらぐらとして、眞逆樣に地面に落ちてしまつた。」

「それから？」

「落ちると同時に眼が覺めてしまつた。」

「變な夢ね。」

「全く變な夢だよ。」

「をかしいわ。」

「何が？」

「實はさつき瀨川さんから馬について妙な話を聞いたのよ。」

「うむ。」

「瀨川さんのお友達のまたお友達ですつて、肺結核で長く患つてゐらしたが、どんな手當をしてもよくならないで、だんだん悪くなつて、しまひには入院なすつたさうですの。何でも長崎とか云つてゐらつしたわ。そして愈々もう手當のしやうもないといふ時になつて、其處の院長さんが、最後の試みに或る療法をされると、それですつかり直つておしまひなすつたさうです。その療法といふのは、馬の脊髄を取つて注射するんですつて。さういふ說は前からあるにはあつたんださうですが、そのためにわざわざ馬一匹殺さなければならないから、實際には餘り應用されたことがないとかいふお話ですわ。」

「なんだつまらない。」

「でも本當に利目が確かでしたら……。」

「僕にやつたらどうかつていふんだらう。」

「ええ、餘り長くお悪いやうですと。」

「然し實際效能が確かなら、今迄に隨分行はれてなけりやならない筈ぢやないか。わざわざ馬を殺さなくても、屠殺所でそれを取つたらいいわけだからね。」

「私も變に思つたんですが、瀨川さんのお話は全く本當のことださうですから。」

「で瀨川君は何と云つてゐた。」

「別に何とも仰言らないで、たださういふことがあるといつて、御自分でも半信半疑で被居るやうでしたの。」

わざわざ夢まで拵へ出してそれとなく尋ねてみた「馬の話」が、案外つまらない內容だつたので、彼は心構へをしてゐた感情のやり場に困つた。そして妻の顏をじつと眺めた。

「お前は瀨川君にかつがれたんぢやない？」

「いいえ、全く本當らしいお話でしたのよ、でもなほも一度お尋ねしてみませうか。」

「なにいいさ、そんな話は。」

暫く沈默が續いた。

「では私、」と妻はふと思ひ出したやうに云つた、「仕事をして參りますわ。御用があつたら呼んで下さいね。」

彼は默つて首肯いた。

一人になると彼は、暫く眼をつぶつてゐたが、やがて身體を少しずらして、緣側の障子を眺めた。西に傾いた日の光りが、障子の下の方三分の一ばかりを明るく照してゐた。そして節くれ立つた木の枝が一本淡い影を投じて、それに一羽の小鳥がとまつてゐた。それらのものに彼はいつのまにか見覺えが出來てゐた。庭の片隅にある梅の枝と、日に當つてる雀であつた。彼はそれにじつと眸を定めた。雀はいつまでたつても動かなかつた。可愛いい小首を傾げたり翼を動かしたりすることを期待してる彼の眼は、殆ど自棄的な氣長さを强ひられた。凡てはただ事もない明るい靜けさのみだつた。梅の枝の影が障子の上を靜に移つてゆくのが感じられるまでになつても、雀は身動きさへしなかつた。それを見てるうちに彼は恐ろしく退屈になつた。

彼はまた頭を枕につけて眼を閉ぢた。轉地して來てからの二ヶ月間のことが頭に映じてきた。それがまた恐ろしく退屈なものであつた。

彼は深い憂鬱と銷沈とに陷つていつた。それはふとした氣分の轉機から、いつもよく陷つてゆく空虛な淵であつた。夢の中で高い處から下へ落ちてゆくやうな氣持ち、それに甘えながらもそれに息づまるやうな氣持ち、さういふ氣持で彼は空虛な淵の中へ沈んでいつた。何をするのも懶いがまたじつとしても居れなかつた。底知れぬ寂寞の感が胸の奧からこみ上げて來た。眼を閉ぢるとあたりが薄暗い荒廢の氣に鎖されさうな思ひがした。彼は大きく眼を開いて、眸をぼんやり天井に向けてゐた。然し何も見てはゐなかつた。

彼はその空しい寂寞のうちに甘え耽りながら、どれ位時間がたつたか知らなかつた。その時女中のはるが、一通の手紙を持つて來た。

「奥様は只今手が汚れて被居いますから。」と彼女は云つた。

手紙は東京の秀子から妻へ宛てたものだつた。彼はその封を切つた。例の通りつまらないことをも甘つたるい文句で長々と認めて、終りに、静子さんをも誘つて明後日あたり遊びに行くかも知れないといふやうなことが、書き添へてあつた。

手紙を讀んでるうちに、彼の心は次第に明るくなつた。讀み終つてそれを枕頭に放り出すと、彼の氣分は一種の快い雰圍氣に包まれてゐた。彼女等の派手な衣裳の色彩や明るい聲の調子などが、彼の頭に浮んできた。

すると彼の心のうちに、妙な矛盾が起つてきた。一瞬間前の陰鬱な氣分と現在の快暢な氣分とが、その間に不調和な溝を拵らへて、彼の心の中で互に面し合つたからである。自分でも譯の分らない妙な矛盾さであつた。そしてそれを見つめながら、彼はいつもの癖となつてる、きびしい自己解剖に耽つていつた。

――病人にとつては、男性の力よりも女性の柔かさの方がよほど快い。看護人はどうしても女性に限る。――さういふ點から彼は、思索……といふより寧ろ夢想の絲口をたぐつていつた。すると先日、妻が用達しに出かけてゐた時、見舞に來てゐた秀子とぽつぽつ意味もない話をしてゐた時、ふと窓硝子が人の息に曇る位の輕やかな心地で、もし僅かな事情の差があつたら自分は秀子と結婚してゐたかも知れない、といふやうなことを、これからでも何かの機會で秀子と戀し合はないとも限らない、といふやうなことを、感じたことがあつたのを思ひ出した。凡てのことは偶然の機會によつて決定され、また偶然の機會によつて覆へされ得る、といふやうな氣がしてきた。平素安心して信頼しきつてることもいつどうなるか分らないやうな不安な氣がしてきた。凡ては氣まぐれな運命の僅かの歩み方に懸つてるやうな氣がしてきた。――自分は何かのことで秀子を戀するやうになるかも知れない。そして自分の妻も何かのことで、例へば……瀬川を戀するやうに……。

其處までくると、彼の夢想はぐるりと一つ廻轉した。――瀬川だつて、何かのことで自分の妻を戀するやうになるかも知れない。瀬川があやつて自分を訪ねて來てくれるのも、妻が居るからかも知れない。もし自分一人だつたら、あれほどよくは訪ねて來てくれないかも知れない。少くとも妻が居ることは、自分一人でゐるよりも瀬川にとつては快いことに違ひない。自分の經驗から云つても、下宿に一人で轉つてる友人を訪れるのよりは、若い妻君の居る友人を訪れる方が氣持ちがいい。そして……。

その時、白いエプロンをかけた妻の姿が現はれた。彼は夢のやうなぼんやりした氣持ちでその方を眺めやつた。

「秀子さんから何と云つて來ましたの？」と彼女は云つた。

彼は俄に夢想から外に放り出されたまま、一寸答への言葉も口から出て來なかつた。

「一寸拜見。」

さう云つて彼女は手紙を讀んだ。

「まあ嬉しいこと。ほんとに二人で來て下さるといいわね。」

「うむ。」と彼は機械的に返事をした。

妻がまた臺所の方へ立つて行くと、彼は自己嫌悪に近い苛ら立つた氣持ちになつた。餘りに馬鹿々々しい考へに、而も餘りに馬鹿々々しいため却つて油斷してはいけないやうな考へに、彼は一種の憤激を感じた。そしてその憤激のやり場を求めるやうに、「病氣がいけないのだ、長い退屈な病氣がいけないのだ、」と彼は心のうちに叫んだ。然しそれでも、心の底に輕い憤懣の念が動くのを、どうすることも出來なかつた。

――兎に角早く病氣を治すことだ、と考へて彼はしひて心を落着けようとした。もし馬の脊髓が結核に效果があるなら、それを注射しても構はない。

然しその時彼の頭に浮んだ馬は、胴の毛と尾とを短く刈り込み、足には鐵蹄をつけ鬣を打つて斷く、逞しい乘馬ではなかつた。慘めな老いた駄馬であつた。身體中にはむく毛が渦を卷いてゐ、長い尾の先はよれよれになつて赤茶け、足には草鞋をはき、首を前方につき出し、光りの失せた眼を地面に落し、口からは泡を垂れながら、重い荷を引いてことりことりと、淋しい街道を辿つてゐた。

彼は不快な氣分になつた。その不快の中に深入りしないために、新聞紙を取り上げて、面白くもない記事に隅々まで眼を通した。それからしまひには、圍碁の處を狹く折り疊んで、その布石の順序を一々辿つていつた。

瀨川が戻つて來た時は、もう日も陰りかけ、食事の用意も出來上つてゐた。

「海はいいね。」と瀨川は云つた。「僕はまだ、大空のやうな藝術といふのは信じられない。然し、海のやうな藝術、或は山のやうな藝術といふのは、信じられるやうな氣がする。さういふ藝術ならあり得るやうな氣がする。」

然し彼は、それに對して何とも言葉を發しなかつた。そして一寸沈默が續いた後、彼の妻は別のことを云ひ出した。

「瀨川さんは隨分でたらめの話がお上手ね。」

「どうしてです？」

「そら、さつき、眞面目さうな顏をなすつて、馬の脊髓がどうだのかうだのつて、すつかり私をかついでおしまひなすつたぢやありませんか。」

「いやあれは、實際聞いた通りをお話したんです。ただあれが事實かどうかは知りませんが、兎に角忠實な報告であつてでたらめではありませんよ。」

「然し實際さういふこともあるかも知れない。」と彼は口を入れた。

「もう奧さんから聞いたのかい。」と瀨川は云つた。「僕も變な話だとは思つたが、友人がどうしても本當のことだと云ひ張るんでね。」

「それでは、」と妻が云つた、「あなたもかつがれた方の仲間ね。」

「いや嘘らしい事實も世にはあるものさ。」と彼は結論した。

そして自分の結論に彼は自ら不安になつた。此度は妻と瀨川とがそれを信じない方の側になつて、彼一人がその說を支持してる形になつた。彼の頭にはまた慘めな駄馬の姿が映じた。「その脊髓を……」と考へると、彼は何とも云へぬ胸惡さを感じた。

食事がすむと、「碁を打たう」と彼は云ひ出した。身體に障るといけないと云つて、妻と瀨川とはそれをとめた。然し彼はきかなかつた。口を利くのが嫌だつた。また瀨川を前に置いて默つてるのも嫌だつた。敵愾心に似た漠然たる感情が彼のうちに澱んでゐた。彼はその感情の出口を碁の勝負に求めた。「君がやらないなら僕一人でやる。」とも彼は云つた。

妻と瀨川とは仕方なしに彼の言葉に從つた。その上、雨戸をしめ切つた室の中は、火鉢に沸き立つてゐる鐵瓶の湯氣で暖くなつてゐた。彼は床の上に起き上り、高く積んだ蒲團に背中でよりかかつて、碁盤を前にした。彼と瀨川とはどちらも笨碁ではあるが、互先のいい相手だつた。

彼は默つて石を下した。何だか頭のしんに力がなく、注意が盤面にぴたりとはまらなかつた。然しやつてるうちに、後頭部の方から熱つぽい興奮が傳はつてきて、次第に氣分が戰に統一されてきた。そして自ら知らないまに三十目ばかりの勝利を得た。

「病氣して强くなつたね。」と瀨川は云つた。

所が二度目になると、彼の石の形勢がひどく惡かつた。方々に雜石が孤立するやうになつた。彼はじつと盤面を見つめて、頽勢を挽回すべき血路を探し求めた。然しあせればあせるほど、頭の調子が妙にうはずつて、肝心な所で行きづまつてしまつた。敵の陣形は如何にも横風で、衝くべき虛がいくらもあるやうに思はれたが、實際石を下してみると、つまらない所で蹉跌したりした。そのうちに彼は、自分の中央の大石が、先手の一着で死ぬ形になつてゐるのを見出した。然しその時、右下隅の攻め合ひに彼はどうしても手をぬくことが出來なかつた。どうにでもなれ！　と彼は思つた。そして、愈々隅の攻め合に負けてしまつても、中央の大石をそのまま放つて、他の所に石を下した。中央の石になるべく觸れないやうにと瀨川が遠慮してるのが、はつきり分つてきた。その石を取られては、目もあてられない慘敗に終るのは明かだつた。もしその石が活きても、彼の方に勝目はなかつた。

もう終りに近づいた頃、彼はどうしても中央に石を下さなければならない手順となつた。そして默つたままその大石に一着を補つて活とした。瀨川が素知らぬ風を裝つてることが、ちらと動いた頰の筋肉で彼に感じられた。

彼の方が十七目負けだつた。

「今度は勝負だ。」と彼は云つた。

瀬川は戰爭を避けようとするやうな石の下し方をした。彼がいくら無理な攻勢に出ていつても、瀬川は地域に多少の犧牲を拂つてまで戰爭を避けた。そして平凡のうちに彼の方が勝となつた。

「も一番やらう。」と彼は云つた。

「いやもう止さうや。またこの次にしよう。」と瀬川は答へた。

彼は默つて碁盤を側に押しやつた。屈辱とも憤激とも云へないやうな感慨が心のうちに亂れた。

「君は卑怯だ。」と彼は口に出して云つた。

「いや、長く打たないせゐか、どうも調子が變だ。」と瀬川は別な答へ方をした。

「あなた、もう横におなりなさいな。」と妻が云つた。

彼は床の中に身體を伸した。枕に頭をつけると、顏だけが妙にほてつて、身體に不氣味な惡寒を感じた。譯の分らない涙が眼にたまつてきた。

彼はそれから殆ど口を利かなかつた。その上もう九時を過ぎてゐた。餘り病人を疲らしてはいけないといふので、皆寢ることにした。それに、彼はいつも晩早く寢て朝早く眼を覺ます習慣になつてゐた。

「電氣を暫く消してくれないか、何だか妙に眩しいから。」と彼は妻に云つた。

靜かな柔かな闇に包まれると、神經が穩かに和らいで、彼は銷沈しきつた氣分に浸されていつた。骨の髓まで妙に力がなくて、手足がばらばらになつたやうな深い疲れを感じた。そして意識が次第に蝕されてゆくやうな、何もかも投り出した安らかな昏迷のうちに、彼はうとうとと眠りかけた。

どれ位時間がたつたか彼は覺えなかつた。何かの氣配にふと眼を開くと、室には明るく電燈がともされて、妻が一人枕頭に坐つてゐた。

「お眠りになつて？」と彼女は云つた。

「うむ。」と答へたまま、彼はぼんやり妻の顏を眺めてゐた。

暫くして彼女はまた云つた。

「何だか額がお熱いやうで心配だから、熱を測つてごらんなさらない。」

「うむ。」と彼はまだぼんやりして答へた。

「碁なんかなすつたから、また熱が出たのぢやないでせうか。」

然し熱を測ると、六度八分きりなかつた。彼女は檢溫器を電氣にかざしながら微笑んだ。眉根に小さな皺を拵らへて輕い憂ひを額に漂はしながら、口元の筋肉を弛めて白い齒並をちらと覗かした。その心配と安堵とを一緒にした彼女を見て、彼は妻を美しいものに思つた。

「何でさう私の顏を見て被居るの？」と彼女は云つた。「御氣分でもお惡いの？　お疲れなすつたのでせう。お眠りになれて？　ぐつすりお眠りなさるといいわ。」

彼は何とも答へなかつた。彼女の顏から眼を外らして、天井の隅にぼんやり視線を投げながら、妻の美しい肉體のことを想つた。轉地してから二ケ月、最近感冒から氣管支に加答兒を起した危險な二週間、その間のことを考へた。殆んど看病ばかりに日を暮してゐる彼女、その彼女の肉體の忘られたやうな性的生活、……そして今、自ら知らずして覗き出したその肉體の魅力。彼は何とも云へない淋しい氣になつて云つた。

「もうお寢みよ。」

「ええ。」

すぐ彼の前に展べられた妻の寢床から、彼は反對の方に寢返りをした。

眠らうと思つて眼をつぶつたが、頭のしんが妙に冴え返つて眠れなかつた。

「瀬川君は？」と彼はふと尋ねてみた。

「もうお寢みなすつたわ。」と後ろで妻の答へる聲がした。

彼はまた眼を開いて、一日のことをぼんやり思ひ出した。さうしてるうちに、襖の笹の葉模樣を見つめてゐる眼の方に注意が向いてきた。その襖を距て、六疊の一室を距てて、安らかに眠つてる瀬川の樣が頭に浮んできた。するとそれがしきりに氣になり出した。彼は深く息をして、左手を額にあてた。——瀬川がこの同じ屋根の下に眠つてるのが、どうしてかう氣にかかるんだらう。瀬川が安らかに眠つてるのが、どうして自分の神經に觸るんだらう。——さう考

へれば考へるほど、益々彼は眠れなくなつた。けれども頭の奥には、輕い痛みをさへ覺えるほどの疲勞が蔽ひかぶさつてゐた。

彼は、妄念を吐き出さうとするやうに深く息をした。そして、肩をすぼめて寢返りをした。すぐ眼の前で、こちらを向いて寢てゐる妻が、大きく眼を開いてゐた。

「おやすみになれないんでしたら、少し頭でも揉んであげませうか。」

「いや、すぐ眠れさうだ。早く眠りつこをしよう。」

「ええ。」と答へて彼女は眼で微笑んだ。

彼はそつと蒲團で眼を隱した。淋しい涙が眼瞼を溢れてきた。そしていつまでも續いた涙が漸く乾きかける頃には、彼は我知らずうとうとしてゐた。

……

翌朝彼はいつになく遲く眼を覺した。朝日の光りが斜に、障子を隈なく照してゐた。その障子を開かせると、露と霜とに濡れた爽かな庭が、すぐ眼の前にあつた。彼はそつと床の上に上半身を起して、庭の方へ向き直つた。彈力性を帶びたやうに思はれる黑い大地が、彼の心を惹きつけた。素足のままその上を歩いてみたい欲望が、胸の底からこみ上げてきた。もうだいぶ長く土を踏まないといふ考へが、根こぎにせられたやうな侘しさを彼の心に傳へた。彼は食ひ入るやうな執拗な眼を、じつと地面に据ゑてゐた。

その時、瀨川が木戸口から庭へはいつて來た。その姿を見ると、彼は急に狼狽したやうな氣持ちになつて、また床の中にはいつた。

「こんなに早くから起きてたりなんかして、大丈夫なのかい。」

「うむ、もういいんだ。それに僕にとつては早朝でもないんだからね。」

瀨川は緣側から上つて來た。

「海に行つて來たがいい氣持ちだね。君も外を歩けるやうに早くなり給へな。」

瀨川は頰に生々とした血を通はして、喫驚したやうな大きい眼をしてゐた。

「君、今日は晩までいいんだらう。」と彼は云つた。

「いや、いつも餘り長く邪魔してもすまないから……、それに今日は少し用もあるので、九時ので歸らうかと思つてゐる。」

「然し大した用でもないんだらう。」

「大した用といふほどでもないが。」

「ではせめて晝御飯でも食べていつてくれないか。僕は一人で淋しすぎる位淋しいんだから。僕は默つてるかも知れないが、それでよかつたら、せめて午頃までこの室に寢轉んでいつてくれない？」

瀨川は默つて彼の方を見た。

「默つててもいいんだらう。」

「ああそれの方がいい。」と瀨川は云つた。「昨日は君が何だか苛々してるやうだつたから、僕は一人心配してたんだよ。默つてるなら午までゐよう。僕はこの緣側で日向ぼつこしながら、雜誌でも讀むとしよう。」

「ああさうしてくれ給へな。」

彼はそれで凡てが、まとまりもないただ凡てが、よくなるやうな氣がした。そして親しい瀨川の顏を見ると、何となく力强くなるやうな氣がした。

（大正九年一月）

理想の女

私は遂に秀子を毆りつけた。自然の勢で仕方がなかつたのだ。

私は晩食の時に酒を少し飲んだ。私達は安らかな氣持ちで話をした。食後に私はいい氣持になつて――然し醉つてはゐなかつた――室の中に寢轉んだ。電燈の光りを見てゐると、身體が非常にだるく感じられた。秀子は室の隅の小さな布團に、みさ子を寢かしつけてゐた。その方へ向いて私は、「おい枕を取つてくれ、」と云つた。

「しッ！　赤ん坊が寢ないぢやありませんか。」と秀子は答へた。

彼女の聲の方が私のよりずつと高かつた。眠りかかつた子供が眼を覺したとすれば、それは寧ろ彼女の聲のせゐに違ひなかつた。然し幸にも子供は眼を覺さなかつた。私は我慢して待つてゐた。所が秀子はいつまでも起き上らうとしなかつた。私は雜誌を五六頁讀んだ。それから秀子の方を見ると、彼女は子供に乳を含ましたまま、いつしか居眠つてゐるらしかつた。

私は立ち上つて、押入から枕を取り出した。そして押入の襖をしめる時、注意した筈だつたが、つい力が餘つて大きな音がした。秀子はむつくり半身を起した。そして、「靜かにして下さいよ、」と云つた。

その言葉の調子が如何にも冷かに憎々しかつた。私は癪に障つた。それで、また例の通りだとは思ひながらも、其處にどたりと枕を投り出して、わざと大きな音がするやうに寢轉んでやつた。

「赤ん坊が眼を覺すぢやありませんか。」と秀子は云つた。「眼が覺めたら寢かして下さいますか。」

「ではなぜ枕を取つてくれないんだい。」と私は答へた。

「それ位自分でなさるのが當り前よ、私ばかりを使はなくつたつて……。」

「ぢやあお前は、いつも使はれてる氣で僕の用をしてるのか。心からかうしてあげようといふ氣はないのか。」

「では御自分はどうなの。子供で手がふさがつてるからといふ思ひやりは、少しもないんですか。」

さういふ水掛論が喧嘩の初まりだつた。然しそれは具體的な事實を離れて、お互の態度に及ぶ抽象的な問題になつたために、どちらも云ひつのるだけではてしがなかつた。そして口論の最中に、俄に沈默が落ちて來た。苛ら立つた憤りが、じりじりと胸の奥に喰ひ込んでいつた。……とは云へ、いつもならそれきりで濟むのであつたが、不幸にも、丁度その時速達郵便が玄關に投げ込まれた。「速達！」といふ配達夫の聲に、「はい」と秀子は答へたが、立つては行かなかつた。

その樣子と、「はい」といふ返辭の落付いた調子とに、私は赫となつた。

「取つといで！」と私は怒鳴つた。

秀子は默つてゐた。

「取つといでつたら！」と私はまた怒鳴つた。

秀子は眉根をぴくりと震はしたまま、じつとしてゐた。私はじつとして居れなかつた。枕を手に取るが早いか、それを秀子めがけて投げつけた。枕は的を外れて、緣側の障子に當り、障子の中にはまつてる硝子一枚壞した。その物音にみさ子が泣き出した。秀子はそれを抱き取つた。私は眼をつぶつて仰向に寢轉んだ。

硝子の壞れた音を聞きつけて、臺所からはるがやつて來た。秀子ははるに硝子の破片を掃除さした。そして、はるが向ふに立つてゆき、子供が眠つてしまつた後、秀子は私の方へ坐り直して云つた。

「あんな野蠻なことをなすつて、もしみさ子が怪我でもしたらどうします！」

私は飛び起きて、齒をくひしばつた。掃除がすみ子供が眠つてしまつてから、冷かに眞劍に談判を初めたのだ。彼女はまた云つた。

「卑劣な！　ご自分に恥ぢなさるがいい。」

その言葉を聞いて私は我を忘れた。「自分に恥ぢるがいい」とは、私が彼女を責むる時によ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com